ユニバーサルイベント協会
10周年 記念誌

2001年～2011年

特定非営利活動法人(NPO)
ユニバーサルイベント協会

理念と概念
10周年に寄せて

今、伝えたいこと

皆さんの周りにいる方々をちょっと思い浮かべてみてください。家族、仕事仲間、地域の人、友達…など、年齢も職業も生活スタイルもさまざま。きっと見た目の体型や髪型、趣味や抱えている悩みも十人十色でしょう。私たちはこれを多様性（ダイバーシティ）と表現しています。生まれつき持っている性別や肌の色、言語、障がいの有無なども各々の多様性。人は誰でも他人とは違う特性を持ちながら生きているのです。このお互いの身体的・精神的な個性の多様性を認め合い、尊重し合い、助け合って暮らすこと（ダイバーシティ理念）、そういう社会が正常で当たり前のこと（ノーマライゼーション理念）だと私たちは思っています。

多様な人が集うイベント

イベントを作り出す時に、このダイバーシティ理念は欠かすことのできない考え方です。さまざま人が集うイベント。誰もが喜びと感動を得ながら、充実したコミュニケーションができる。イベントはそんな空間となることが当たり前だからです。

ユニバーサルイベントは、誰もが、性別や年齢、人種に関わりなく、高齢になっても障がいがあっても、皆と一緒に参加でき快適にコミュニケーションできる会場構造と運営方法をもったイベント環境の実現を目指したものです。

ユニバーサルイベントの4視点

ユニバーサルイベントの実現には 4 視点が必要です。一つは、ユニバーサル・アクセシビリティー。イベントに容易にアクセスでき参加できる経路や通路、施設構造の実現です。二番目は、ユニバーサル・コミュニケーション。誰もが容易に理解できるプログラム表現の実現です。例えば、音声情報や文字情報、手話、といった見えない人、聞こえない人に向けた情報保障といってもよいでしょう。三番目は、ユニバーサル・オペレーション。誰に対しても公平・平等なホスピタリティをもった運営内容と態勢の実現です。来場者の不便さへの気づきが基本となります。四番目は、サスティナビリティー。経済的自立を可能とし、未来へ向けて環境負荷のない持続可能なイベント環境の実現です。

これからのダイバーシティ

人は誰でも年を重ね、高齢になります。今まで簡単にできていたことが、できなくなる。歩きづらくなったり、見えにくくなったり、不便なことも増えていきます。しかし、世の中も変化をしています。近年の IT 化や技術の進歩によって、生活や移動、コミュニケーション方法が格段に便利で多様になりました。自分の変化、他人の変化、世の中の変化。

ユニバーサルイベントとは

ダイバーシティ　&　ノーマライゼーション

▼

ユニバーサルイベント

- ユニバーサル アクセシビリティー
- ユニバーサル コミュニケーション
- ユニバーサル オペレーション
- サスティナビリティー

▼

ユニバーサルイベントの実践

▼

ユニバーサルスポーツ
ルールを創って共に楽しむ！

ユニバーサルキャンプ
不自由さの共通体験による相互理解！

ユニバーサルスポーツ

私たちが推進しているイベント・プログラムの１つがユニバーサルスポーツ（ユニスポ）です。皆さんご存知の通り、スポーツは競技をするのも、観戦をするのも人気の高いイベントです。「ルールのある身体競技」であり、ルールを守れば誰もが参加できる世界共通の文化。そしてユニバーサルスポーツは、このスポーツの価値をさらに高め、広げようとするものです。ユニバーサルスポーツは“そこにいる誰もができる”考え方でルールを創りさえすれば、身体的・精神的な個性の違いに関わらず一緒に楽しめ、コミュニケーションできるスポーツの実践方法なのです。個性の数だけルールが創り出せる、つまり新しい競技方法が生まれるスポーツの考え方といってもよいでしょう。障がい者の積極的な社会参加はもとより、超高齢社会を迎えた日本にとって、ユニバーサルスポーツの考え方は、ますます重要になると考えています。

ユニバーサルキャンプ

ユニバーサルイベントを丸ごと体感できる方法として、私たちが提案しているもう１つのイベントが、ユニバーサルキャンプ（ユニキャン）です。自然豊かな野外でのキャンプ場で過ごす２泊３日。テントを張る、お互いを知る、一緒に食べる。さまざまな特性を持つ人々が、仲間となって一緒に生活を共にし、楽しみつつお互いの理解を深めることのできる場を生み出します。自分と他者との違いに気づき、日常生活では得られない発見の宝庫といえます。ダイバーシティやノーマライゼーションの考え方に基づくプログラムはもとより、ユニバーサル・アクセシビリティーやユニバーサル・コミュニケーション、ユニバーサル・オペレーション、サスティナビリティーなど、ユニバーサルイベントの全てを体験でき、実践できるイベントとなっています。

この変化する多様性をしっかり受け入れ活動していくこと。これは、新しい時代を生き抜くヒントかもしれません。多様性を受け入れた人のもとには、さまざまな人が集まります。そして、それがイベントという、新たなイノベーションやパワーを生み出す空間・場所になる。
10 周年を経て、私たち NPO ユニバーサルイベント協会も、新たな視点や多様性を重ね、広めながら、ユニバーサルイベントの実現、方向性を探っていきたいと思います。

BACK TO THE UEAの歩み 10th 2001-2011

2011年に10周年を迎えたユニバーサルイベント協会。
“みんながワイワイ集まって楽しい場所づくり”は、確かに豊かに育っています！

START!

1999年 9月　日本イベントプロデュース協会（JPEC）内に「ユニバーサルイベント委員会」が発足

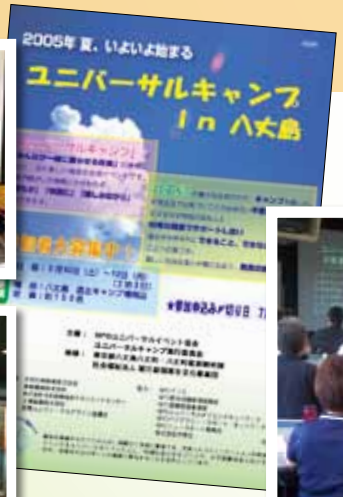
2000年11月　書籍『いまなぜユニバーサルイベントなのか』日本イベントプロデュース協会　発行

2000年11月　JPECフォーラム「ユニバーサルイベント・みんなで歩こう品川宿」開催

2001年10月　「特定非営利活動法人ユニバーサルイベント協会」が東京都より認証される

2002年10月　「ユニバーサルスポーツ・コーディネータ養成講座」開講。以降、全国の自治体、社会福祉協議会などで「ユニバーサルスポーツ」に関する講演・研修を依頼されるようになる

2005年 9月　「第1回ユニバーサルキャンプin八丈島」（ユニキャン）を実施。以降、当協会の目玉企画となる



未来へ続く…

2006年９月　国際ユニヴァーサルデザイン会議にて「第１回ユニバーサルキャンプ in 八丈島」について論文提出・発表

2008年　７月　「第１回ユニバーサルキャンプ in 能古島（九州）」が開催される。以降、毎年実施

2009年　５月　「ユニスポ委員会」を発足し、「ペタンク」（ユニペタ）や「蕎麦打ち」（ユニソバ）などの行事を年に数回実施

2010年　３月　「ユニバーサルウォーキング」（ユニウォーク）をお台場で実施。以降、押上、川越、横浜など、首都圏を中心に年に数回実施

2011年　３月　ユニバーサルイベント協会が10周年を迎える

2011年　９月　「第７回ユニバーサルキャンプ in 八丈島」が悪天候により中止。初の代替プログラムとなる

2011年10月　「UDJ手話サークル」から運営をバトンタッチ。「UEA手話サークル」を開始

UEA未来会議

イベント

“これ面白そう”　“ちょっと興味があるな”
誰でも参加でき、ワクワクした時間を過ごせるのがイベントの魅力。
私たちはイベントに特別な何かを加えるのではなく、誰もが参加できることを前提に作られたイベントを“ユニバーサルイベント”と位置づけ、
その実現を目指し、方向性を探っています。

楽しいから人が集う。集いから新しいイベントが生まれる

内山：UEAも10周年。いろいろな人との関わりで育ってきました。これまでの歴史と、未来についてのワクワクするような話を皆さんからお伺いしたいです。まずは“やろうよ”という始まりの話から進めてみましょう。

梶原：2000年にこの協会の母体であるイベントプロデュース協会主催のフォーラムがあって、内山さんが企画した“ユニバーサルイベント・みんなで歩こう”がテーマだった。当時バリアフリーは知っていたけれど、これは初めて聞く言葉で、この新しい発想に「あるな」と思った。

内山：このフォーラム開催時、まず声をかけたのがタロさんと岡村さんですよね。

タロ：すっかり記憶の彼方です（笑）。会場の場所が品川の坂の途中という、車いすには厳しい場所にあった。しかも段差も坂もある道で、イベントのための整備もされていない。でも実際皆さんが生活している旧東海道をそのまま使ったイベントは、作られて与えられたものではなく、会場までの道をみんなで考えながら歩く、いいイベントだな、と思った。

岡村：今思えば初めてのユニウォークだったのかも。僕は前からユニバーサルデザイン（UD）のことを知っていたので、「障がい者に対して施しではなくて、みんなで楽しめる方法を考えよう」というコンセプトを内山さんから聞いた時、すんなり入ることができた。

梶原：ここで出会った皆さんとの縁もあり、仲間たちと、NPOとして独立した。ちゃんと真面目な話もして、その後には楽しい飲む時間が待っている。その時間からイベントも生まれる。直感でこの協会は長続きするぞ、と思った。

NPOとしてスタート。まずはユニスポを開講

梶原：発足したからには何か協会で仕掛けたいとみんなで話し合っていた。1年たって会議でも飲み屋でもだんだん話題がなくなって。テーマは何でもよかった。概念だけ語っていても絵に描いた餅。

内山：そんな時、文部科学省から発信された「総合型地域スポーツクラブ」の話があって。誰でもスポーツに取組みやすい環境を全国に作ろうという。これ私たちも何かできるんじゃないかと思った。“ユニバーサルスポーツ・コーディネーター”という名称で、資格制度を立ち上げたんですね。

岡村：横浜のラポールというスポーツ施設に行き、1日か

がりで撮影しましたね。この講座をきっかけに仲間の輪が少し広がって、メンバーも増えていったような…。

内山：そう。いろいろな突拍子もないアイディアを、支えてくれるメンバーが増えましたよね（笑）。

約 100 名が八丈島に。ユニキャンが実現

内山：UEA はユニバーサルキャンプなしでは語れないですよね。その発端は、企業で開発された UD 製品。配慮はあるけれど視点がちょっと違う。聞いてみると皆さん障がいのある人とは関わっていない。もったいないなと。どこかで接点をもってもらいたいと思っていました。

梶原：そんな時に、八丈島とご縁があった。

内山：「八丈島でキャンプをやりたい！」と言い出したら、当時の理事たちはちょっと引いていましたよね。よく覚えている（笑）。

梶原：でもメンバーにキャンプのプロがいた。私たちはイベントのプロ。実現しちゃいましたよね。

内山：誰でも不便さを感じられるところに連れて行きたかった。八丈島は開放感もあり、場所として最適でした。ここで車いすのタロさんや岡村さんがテント張りの指導をする。いかにみんな対等であるかを知る。参加者にはインパクトがありましたよね。

タロ：自分も小さなキャンプはやっていたが、ドーンと 100 名規模は初めてで、その気づきのすごさに圧倒された。プログラムは練りに練りましたよね。

広がる、つながる新たな仲間

内山：このユニキャンをきっかけに、入ってくれたメンバーにもちょっと聞いてみましょう。

東海：理屈抜きで楽しいから続けている。若い人たちと関わるのが大好きで、障がいの有無っていうのはあまり気にしていないかな。親の介護とか、仕事のこととか自分にもいろんな出来事があって。でも会社、家庭、学校とは違う、自分のメンタリティを支えてくれる場所。この場所があるからバランスがとれている気がする。みんなには感謝しています。

石巻：私は生まれつき脳性まひがあり、サポートされるだけの人生だと思っていた。でも高校の先生の“これからはサポートする役”という言葉がまず人生を変えてくれた。就職して自立はしたけれど、社内だけの活動だとどうしても固定概念が生まれてしまう。それを外したくてユニキャンに参加した。今までは障がいを真似されてからかわれるのが嫌だった。でもここは違う。自分を人と見てくれる仲間。真似されて幸せに感じる自分がいる（笑）。これが自分の居場所かなと思えるようになった。

迫：アメリカで生活していた時に、肌の色で差別されることにどうして？と思っていた。自分はボーダレスでいたい、と思っていて。そんな経緯があって UEA のイベントに共感したのかな。今はシングルマザーで二人の子供を育てている。学校でいろいろな悩みに直面する息子を見て、友達と少し違ってててもいいじゃん！というのを知ってもらいたかった。なので息子と一緒に参加しています。

柴田：企業研修で参加して、そのまま法人会員として活動するようになった。さっき「場所」というワードが出ましたが、自分の会社は空間デザイン、場所づくりをしている企業。でもイベントっていうのは、ハードがなくても人さえいればいつでもどこでもできる。一過性でなく継続してできるもの。そんなところに魅かれている。また、自分が経験して感じたことを社内でも効果的に広めていきたいと思っている。

未来の UEA

内山：ではこれからの UEA は？破天荒な意見も OK。

東海：“多様性の享受”にビビっときている。いつでも集える場所を作る。冷蔵庫を置いて、ビールを入れておけばコミュニケーションが生まれる。

岡村：イベントバーみたいな、会社の人を誘って気軽に参加できる場所もいい。

迫：飲み会は大事。ただ飲みたいだけじゃなくて（笑）、実際に触れてもらうことが大切。

石巻：障がい者のこと、もっとやわらかく面白く表現したい。漫画で表現したり、ウェブサイトを使って発信していきたい。

タロ：出張キャンプ！家からあまり出られない人を対象に押しかけて、近場で一緒にキャンプをする。

内山：まだまだ新しいアイディアは沢山生まれそう。思いついたら、是非、次の会議に持ってきてください！

UEA未来会議

ユニスポ

いつでも、どこでも、誰でも参加できる。
参加した誰もが楽しめるのがユニバーサルスポーツ。
ルールを工夫したり、スポーツをミックスしたり…。
ユニスポなら、体を動かすだけじゃなく、交流だって楽しい。
そんなユニスポへの工夫と推進できる人材の育成を行っています。

メンバーにとってのユニスポは？

守屋：スポーツがもともと好きなので、誰でも参加できるものを何か企画したいなと、ユニスポの資格を取得しました。そしてまずユニウォークを考えた。実際に企画をしてみて、部活とか、サークルとも違う集まりが築けて面白い。みんなはどう？

柴田：自分はスポーツが苦手なので、サッカーとか野球と言われると、まず無理と思ってしまう。でもウォーキングは、自分でも対等にやれそうで、スポーツとしては敷居が低い。ペタンクとか、一般的に聞いたことがないスポーツも参加しやすいです。

藤井：私も得意ではないけど、やるのも見るのも好き。ユニスポはスポーツというより、コミュニケーションが楽しいから参加している。でもやっぱりスポーツは、競うこと、達成感を得ることが大切、というのも感じている。入口は楽しさからでいいので、結果的にはスポーツの楽しさまでたどり着きたいっていう思いがあります。

内山：ルールを変えてもいいのがユニスポだから、時にはその場で工夫してみんなが楽しめるようにしなければならない。そこが楽しさだと伝わるといい。例えば“サッカーでうまい人は足を使っちゃダメ”とか、“サッカーボールを楽しむ”みたいな。

守屋：“UD野球”ならやりたい、参加したい、という人もいるかもしれないですね。“ユニバーサル”っていうのが、頭につけば、敷居がぐっと下がるようなイメージづくりが大切ですよね。

渡邊：自分は“ユニバーサル”って聞くと「なんでもアリ」って思えて、メンツや内容が想像できない分、逆に敷居を高く感じてしまう。だからもうそっくり名前を変えちゃうっていうのもアリかも。そこから提案してみる。

ユニスポをもっと広げるアイディアは？

守屋：ではもっと普及させるには、どんなアイディアありますか？

渡邊：今あるスポーツではなくて、全く別の何か（参加しやすいスポーツ）を考えてもいいかも。これはユニバーサルスポーツだ！といえる何か。

高橋：UEA が発信する柱のスポーツがあって、そこから普及させていくとわかりやすいかも。キャンプのプログラムとしても毎回やりますが、どんなスポーツにしようか、とカテゴリーから始まってルールまで考えるので、時間が足りなくて、スポーツを楽しむところまで行けない。考えるのは大事なんだけど、スポーツを“楽しむ”ということも大切。

藤井：今はほぼ都内で、限られたコミュニティでユニスポをやっていますよね。でも UEA 発のスポーツがあれば、これどうですか？と全国のみんなに提案できるし、レスポンスがあればさらに面白くなる。

渡邊：運動会的なものもいい。スポーツってどうしても得意不得意があるけど、運動会ならいろいろな種目が考えられるし、特性を活かすような内容にすればみんなが参加しやすいよね。

阿南：この前みんなで参加した、駅伝大会がとても楽しかった。走ったのも楽しかったし、みんなを応援できたのもよかった。

守屋：阿南さんはどうして資格を取ろうと思った？

阿南：就職活動で資格が欲しかったから（笑）。キャンプでユニスポに取り組んで、ルールを考えるのが難しかった。でも、同じスポーツなのに他の班と全く違うものができて面白いと思った。実はスポーツするより、みんなに会いたいから参加しています。私は大学で乗馬をやっていますが、ユニスポにならないかな、と先生にも相談しているんです。「できないかも」と思っているものをみんなでやりたい。みんなでならできると思えるから。

藤井：確かに多様で面白い人が集まっているから、「みんながいればできる」があるよね。

渡邊：なのでもっと新しい人が参加しやすいイベントにしたい。最近参加者が固定されてきた。その分コミュニケーションは困らないけど、初めての人が参加しにくい雰囲気は避けていきたい。

高橋：PR 方法が大切ですよね。告知をした時に「行ってみたい」と思われる団体にならないと。アナウンスの方法も大切だし、実態もね。

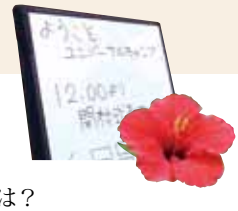
内山：ここ数年で UEA には若いメンバーも増えて非常に活性化してきた。会の目的がぶれないようにしつつも、どんどん広げていきたい。「面白いからやってみる」というノリをもっている人も大切。リスクとか考えずに面白いと感じたら参加してほしいなぁ。

守屋：今後、ユニスポをどう展開させ、どこにリンクさせていくか楽しみですよね。スポーツが苦手な人も巻き込んで、適度に体を動かすことができる場にしたい。あと、例えば知的や精神障がいなど、ひとりでは参加しにくい人の場合は、家族も巻き込むイベントをやりたい。ユニスポが入口になって、同じ思いで活動できる生涯の仲間と出会える、そんなきっかけの場所になるといいですね。

UEA未来会議

ユニキャン

さまざまな特性をもつ仲間たちとキャンプ生活をともにする。そして自分と他者との違いに気づき、互いの理解を深め、自立・自律を育むのがユニキャンプログラム。ダイバーシティの考え方に立ち、参加者へ、そして社会へ「みんなが一緒に活き活き暮らせる社会」への意識を喚起し、行動を身につけ、ユニバーサル環境の普及を目指しています。



様々なフィールドから集う実行委員。参加のきっかけもいろいろ

高橋：ユニバーサルキャンプも今年で7年目。今までのこと、これからの未来像について、実行委員のメンバーとともに語りたいと思います。まずは参加のきっかけを。

渡邊：もともと旅行に行くのが好きで、たまには団体で行くのもいいかなと。「小笠原」「八丈島」で検索してみて、趣旨とか何も考えずに申し込んだ。つまらなかったら途中で帰ればいいや、ぐらいな感じで（笑）。自分も車いすなので、参加しやすいかなとは思った。

守屋：企業ボランティアで知り合った人からの紹介で興味を持った。知的障がいの姉がいるので、自分は小さい頃から特殊学級に遊びに行ったりするのが日常で…、でも車いすの人、ろうの人とはキャンプで初めての出会い。楽しみでもあったし、不安でもあった。

飯塚：手話通訳として、1回目のキャンプに参加しました。泊まりの仕事が来たぞ、とワクワク。普段は通訳として、できあがったイベントに参加するパターンが多いけど、ここはみんなで考えながら進んでいく現場。ユニキャンをきっかけに、自分はイベントの作り手になるのが好きなんだなと思った。

衝撃の出会い、広がる人脈

高橋：ユニキャンに参加してまず驚いたことは？

渡邊：一番インパクトがあったのが、協会の東海さんとの出会い。それなりの年齢でポジションのある方が、毎年夢中になって参加している。衝撃でした（笑）。ちょっと面白そうなイベントだぞ、と思った。

守屋：ろう者に会って、聞こえないだけで、こんなにコミュニケーションとれないの！？と驚きました。また、人生観を変えてくれる人との出会いもあったり。

高橋：たしかにキャンプに参加しないと、なかなか知り合えない分野の人とも出会えますよね。自分も手話通訳者に興味をもつようになった。

柴田：見て分かる障がいだけでなく、毎年いろいろな特性に驚く。今年は初めて内部障がいの方の詳しい話が聞けて、知らないことはまだまだあるなと。

飯塚：メインプログラムであるダイバーシティコミュニケーションの“関わりの部屋”はまさに“障がいは誰にでもあるもの”を伝えるところ。メンタルでの障がい、各々が抱える問題など、聞きたい話はたくさんあるけど、センシティブな話題だけに、初参加者への依頼は難しい側面もあります。

高橋：盲ろうの方の参加もインパクトありますね。

飯塚：どうやって話してよいかわからず、その時は深い話ができなくても、帰ってメールをしてみるとお互いスムーズに意思疎通できたり。“この人こんなキャラだったのか”とガラッとイメージ変わって面白い。こういうコミュニケーションの形があることも伝えていきたいですよね。

ユニキャンファンは増えている？

高橋：協会内で活動中の皆さんの意見を聞いてきましたが、外への影響力ってどうでしょうか？

守屋：会社をなんとか巻き込みたいって気持ちがあって、あの手この手でPRを考えていますが…。

高橋：企業にいる人がファンになって言いふらしてくれるのは影響力がありますね。実際、“このキャンプは社員に継続して参加させた方がいい”と、人事に直接交渉してくれる人もいて、励みになる。

守屋：八丈島の方とはツイッターでよくやりとりをしますが、いろいろと宣伝してくれてありがたい。ユニキャンの影響で島の手話サークルで勉強始めました、という人もいますね。

阿南：私は今年初めてスタッフに立候補して、こんなにも八丈島の物を借りているのかと驚きでした。島の人が自然と手伝ってくれる姿を見て、いい関係だなと思いました。

山岡：スタッフになる人も含めて、社会にユニキャンファンをどう広げていくのか。私は企業にPRする立場で関わっていますが、キャンプの魅力を伝えきれているのか、と発信方法をいつも考えています。そして何がリターンできるのか。直接参加しなくても支えてくれるファンも増やしたい。

高橋：八丈島へは何かしら観光の面で協力できるといいのかな。あとさっき島の手話サークルの話があったけれど、ずっと協力してくれているちょんこめさんたちからも、ユニキャンをきっかけに島の人との関わりが増えてうれしい、と言われたことがある。

柴田：どんどん広がってほしいけれど、1回のユニキャンでは120名の参加が限界かな。広げるには機会を増やすことも大切かなと思います。

今後はコラボ？　場所づくり？
私たちはつなげる役目

高橋：では、今後、ユニキャンを広げる、つなげる、そして、知名度を上げるために、何かアイディアありますか？

柴田：学校関係者とか…。授業とまではいかなくても、自由研究とかユニキャンのプログラムがコラボできたらおもしろい。

高橋：自分はＰＴＡでも活動していますが、ユニキャンに興味をもってくれる人もいる。先生、保護者、子どもとリンクさせたいなぁとの思いはありますね。

山岡：興味を持ってくれた人が参加して、その人のミッションとユニキャンがうまく合致すれば、お互いに得るものがあって、交流がつながっていきますよね。

飯塚：八丈島の学生さんたちにも参加してもらうのはどうでしょう。小さいエリアで生活している人たちが、島以外の大人と交流することで将来のことを考えるきっかけになるんじゃないかな。それが島への恩返しになれば。

守屋：誰でも多少は興味があるイベントだと思う。その興味の度合いときっかけは人それぞれだから、歩み寄ったり、ちょっと強引に引き込むのもいいかも。

飯塚：もうひとつ。島の宿泊施設に泊まりたい。プログラムが終わったら班それぞれ宿に戻って、ご飯を食べたり、お風呂に入ったり、島の人たちとワーワーやる。それが宿の人の経験になって、うちの旅館は誰でも泊まれますよ、みたいな。って、実はお風呂に入って布団で寝たいっていう、ね。（一同爆笑）

高橋：回りくどい野望でしたね（笑）。でもキャンプ＝テントじゃないしね。

渡邊：今年代替プログラムを経験して、キャンプじゃなくてあの短い期間でも気づきは得られるんだなと思った。

飯塚：もっと裾野を広げたい。参加者が増えれば、新しいメンバーもアイディアも増えていく。2泊はムリな人でも参加できて気づきが得られる形態のイベントを増やしたい。

渡邊：機会が多ければ声もかけやすいですしね。みんなで温泉にいったり、観光しつつダイバーシティを知る。もっと面白いことできそうですよね。

高橋：八丈島は継続しつつ、気軽に参加して同じように気づけるイベント…そして地域と連携した仲間と集える場所づくり。そんな役目を新たな10年に向けて考えていけたらいいですね。

あなたにとってユニバーサルイベント協会とは？

UEA メンバーに聞く

固定概念をなくすことを気づいた場所

活動中でも個人的な意見を突き通すのではなく、人の意見を聞きながら、同じ目標に向かっていくのが大切と気づいたのがこの UEA に参加して一番よかったことです。これからもいろんな障がい者やみんなが参加しやすいイベントを創りあげながら、UEA が広まっていければと考えています。素晴らしい仲間と活動でき、最高です。

石巻 望

日常の目線を変えてくれた場所

初めは知らない世界。
でも参加してすぐに日常の目線が変わった。喫煙者だけどベビーカーの人がいれば、タバコを配慮する。見えない人がいれば声かけてみる。以前はできなかった。ちょっとしたことに気づけるように、そこが一番大切。この UD のモラルは世界に普及すべき。開発途上国にももちろん必要。普及には予算ありきと思われがちだが、根本は人。ハードのインフラもソフトも人の認識次第。人と人との関わりで人間が変わる、予算も変わる。
気づくというのは大切なこと。
だからみんなに体験してほしい！

松行 俊二

気構えしたり、縮ったりしなくていい場所

見えない自分に、ろうの人がガンガン話しかけてくれる。根がさびしがり屋の自分。聞こえない人も手話がないとさびしいよなと思って、自分もできるだけ手話を使う。分かるまでちゃんと教えてくれる。だから自分も分かるまで聴きたい、伝えたい。いろんな人に関心を持ち続けることと同時に、自分自身も周りに関心をもってもらえる人になることが大事。UEA から新しいコミュニケーションマナー、ルールをつくるっていうのも面白い。今後はもっといろんな障がいの人、こども、外国人がキャンプに参加してくれるといい。
企業の構成要員もそう。
偏りなく、誰でも受入れてくれる社会。
あるべき世の中の状態になるといいな。

松村 道生

「何かをしてあげにいく」という気持ちに自然となれる場所

「何かをしてあげにいく」
ではない UEA のイベントは初め「参加していて大丈夫なのかな？」「何かしなきゃいけないのかな？」と不安になる。けれどだんだん「何それ！私にも教えて！」と自然に輪の中に入ってしまいます。
私は今 UEA が大好きで、みんなに会えるだけでうれしいと思っています。そんな UEA を支えていけるように、魅力的で新鮮なイベントを開催し続けられるように、これからは「今どうして自分はこう思ってるのだろう」などもっと自分で考えて行動したいと思います。

阿南 有希

人との距離感心地いい場所

いろいろな仲間と出会える UEA。それは家族とも学生時代の友人ともちょっと違う。心地いい他人との距離感がある。ちゃんと参加してもいいし、少し参加してもいい。深く知るのもいいし、緩やかに関わってもいい。自分次第で何でもいい UEA ！でもどうして長続きしているのか？きっとメンバーの根っこに相手を気づかう気持ちがあるから。
だから私もまだまだ参加しますよ！

藤井 久美子

聴者の世界を知りながら、自分の UD も広げる場所

ろう者は、会話が飛び交う会議のような場面でタイムリーな理解が難しく、意見をうまく伝えることが不可能という側面があります。会社の中で手話通訳をつけた会議は非常に稀有ですが、UEA の会議はろう者が参加する日は手話通訳がつきます。聴者の会議の進め方や、意見を言うタイミング、話をコンパクトに伝えるコツなど、UEA の会議を通して得た知識や経験が多々あり、それらは本業でも大いに役立っています。
また第１回ユニキャンの終了後、代表理事の内山さんに依頼を受け、手話サークルを立ち上げ講師を担当してきました。手話の習得はもちろんですが、ユニバーサルデザインやダイバーシティな触れ合いの実践を通してさらに深く理解することを主眼に指導をやらせていただきました。月に１回のサークルなので上達は難しいですが、あっち（怪しげな手話を使いながらの飲み会）の方を楽しみ？に通ってくる方々が多く、その中から多くの人材を輩出してうれしく思っています。

三原 毅

これまでも、これからも、ユニバーサルイベント

UEA はネオジャポニズムの提唱者になろう

1867 年（慶応３年）、ちょうど明治維新の１年前、江戸時代にパリで開催された博覧会には江戸藩、薩摩藩と佐賀藩の３藩が初めて出展をし、この時に出品した浮世絵がその後のヨーロッパのアート社会にジャポニズムを生み出し、絵画をはじめとした表現方法が大きく変わったことたことは記憶に新しい。いま、ユニバーサルデザインを「デザイン」と「ファンクション」を求める観点から言うと大いにネオジャポニズムに変貌するチャンスにあり、我が国はいまその岐路に立っている。来年のロンドンオリンピックを機にイベント ISO が提唱されている。ユニバーサルイベントもまた、スポーツにおいて、イベント全般において日本を発信源としたネオジャポニズムの提唱者になろうとしている。私たちの行動も今は小さなものだけど、八丈島は将来、ネオジャポニズムのメッカになるものと確信している。

松平 輝夫

生き方を再考できる場所に

もう 10 年、無事に 10 年、やっと 10 年。今年７年目となった「ユニバーサルキャンプ in 八丈島」がきっかけだった。UEA の理念を伝えるツールが固まり、人の縁と共に豊かに育ってきた。これからは、日本のみならずアジアなど海外各国とも手を携えれば、言葉の違いも、慣習の違いも、プラスの気づきに。新たな出会いに人生観も変わる。それをこれからさらに成長し、変化を続けるユニバーサルイベントを通じて伝えたい。先が混沌として見えにくい時代でもある。だからこそ、私たちのような協会には意味がある。本音でつきあい、仲間と目標に向かっていける場所。時には気分転換に、明日を生きる自信や活力に。自分の居場所になれば、そこはお金では得られない価値になる。自分の生き方を見いだせる、そんな場所にこれからもしていきたい。

伊藤 芳晃

■ 協会概要

特定非営利活動法人　ユニバーサルイベント協会
設立：2001 年 10 月 12 日（東京都認証）
代表理事：内山 早苗

■ 活動内容

ユニバーサルキャンプ in 八丈島
ユニバーサルスポーツ・コーディネーター養成講座
ユニバーサルツーリズム
ユニバーサルイベントによる地域活性化
その他、ユニバーサルイベントに関わる研修・講演・出版・調査

■ 本部事務局

〒 108-0075　東京都港区港南２丁目１２番２７号　イケダヤ品川ビル３ F
TEL　03-5460-8858　FAX　03-5460-0240
E-mail　info@u-event.jp　URL　http://u-event.jp/